

あとがき

～「科学の芽」賞はすべての子どもたちに開かれています～

宮本信也

『もっと知りたい！「科学の芽」の世界』シリーズは、筑波大学が主催しております「科学の芽」賞の受賞作品を掲載した書籍で、2008年から2年ごとに発行されています。本書『もっと知りたい！「科学の芽」の世界PART6』は、第11回（2016年度）と第12回（2017年度）の「科学の芽」賞受賞作品を掲載しています。

「科学の芽」賞は、全国の小学生・中学生・高校生を対象として、自然や科学への関心と芽を育てることを目的として行われている科学コンテストです。筑波大学の前身である東京教育大学の学長を務め（1956年～1961年）、1965年にノーベル物理学賞を受賞した筑波大学ゆかりの朝永振一郎博士の功績を称え、筑波大学における朝永振一郎博士生誕100年記念事業の一環として、2006年から筑波大学の主催で毎年実施しています。小学生から高校生を対象とした科学コンテストには多くのものがありますが、本賞は、一つの大学が全国の小・中・高校生を対象として実施しているコンテストとして現時点では唯一のものといえます。

第1回目（2006年度）の応募総数は645件でしたが、本書に掲載されている第11回目は2,919件、第12回目は3,086件と、回数を追うごとに応募数は増えてきています。国内のみならず、海外の日本人学校からの応募も増えてきています。これまでに応募いただいた海外日本人学校の国には、中華人民共和国、大韓民国、タイ王国、マレーシア、インド、イラン・イスラム共和国、ハンガリー共和国、イタリア共和国、ポーランド共和国などがあります。一方、「科学の芽」賞受賞数は、毎回大きく変わらず、小学生部門8～10件、中学生部門7～9件、高校生部門1～3件で推移しています。毎年、受賞のハードルが高くなってきているともいえるでしょう。それだけ、受賞作品のレベルも上がってきています。本書をご覧いただければ、そのことを実感いただけるものと思っております。なお、「科学の芽」賞には、「科学の芽」賞のほかに、「科学の芽」奨励賞、「科学の芽」努力賞、「科学の芽」学校奨励賞がありますが、第11回目より「科学の芽」探究賞を新たに設定しました。探究賞は、第11回目の募集から、特別支援学校（知的障害）の児童・生徒さんからも応募いただくようになり、その姿勢を表彰するために設けたものです。

『もっと知りたい！「科学の芽」の世界』シリーズは、「科学の芽」賞受賞作品のすべてを第1回目から掲載しています。上述しましたように児童・生徒を対象とした科学コンテストはいろいろありますが、すべての受賞作品の内容を見ることができる本書のような出版物はあまりないのではないのでしょうか。受賞作品は、大人顔負けの最先端の研究成果ばかりではありません。小学生から高校生までの子どもたちが、素直な眼で見た事象から感じたふしぎさを、その子なりの発想や工夫により少しでも謎に近づこうとした作品も多く含まれています。これが、本シリーズの特色でもあり、ある意味では「科学の芽」賞の特徴でもあるといえるかもしれません。本シリーズは、科学に向き合う子どもたちの独創的な発想や姿勢を大人たちに示してくれるものであり、また、夏休みの自由研究など子どもたちの研究を指導される学校の先生方や親御さん、そして、何よりも身の回りのいろいろな事柄に『なぜだろう？』、『何なんだろう？』とふしぎの眼を向ける子どもたちに役立てていただけるものと考えております。

ところで、「科学の芽」賞の名称の「科学の芽」という用語は、朝永博士が書かれた色紙の言葉から引用されたものです。その色紙は、1974年11月6日に国立京都国際会館で行われた、湯川秀樹博士、朝永振一郎博士、江崎玲於奈博士の3名のノーベル物理学賞受賞者による座談会「ノーベル物理学賞受賞三学者 故郷京都を語る」で、子どもたちに向けた言葉を要請され、朝永先生が書かれました。この色紙は、京都市青少年科学センターに保存されています。筑波大学ギャラリー朝永振一郎名誉教授記念室 (<http://tomonaga.tsukuba.ac.jp/room/purpose.htm>) にはそのコピーがありますので、筑波大学に来られる機会がありましたらご覧いただければと思います。

ふしぎだと思うこと　これが科学の芽です

よく観察してたしかめ　そして考えること　これが科学の茎です

そうして最後になぞがとける　これが科学の花です

この朝永先生の言葉には“科学する心”が述べられていますが、自然科学に限らずあらゆる学問分野に共通する姿勢を表しているともいえるのではないのでしょうか。

「科学の芽」賞は、決して、誰もが感心する先鋭的な研究だけを求めているわけではありません。これからも、ふしぎだなど感じる子どもたちの「科学の芽」を大切に育てていきたいと考えています。本書をご覧いただいている大人の方たちにも、子どもたちのそうした素朴な疑問を大事にしていただければと思っています。

今後とも、「科学の芽」賞へのご理解をどうぞよろしくお願いいたします。

[前「科学の芽」賞実行委員会委員長]